「一」を含む数詞節の習得
—中国語母語日本語学習者の作文データに基づく調査—

倉品さやか
国際大学

要旨

母語の転移は、誤用分析の研究から、第二言語習得における主要な要因とは見なされなくなってきたが、迫田（2002）、奥野（2005）に述べられているように、学習者の習得を考えるうえでやはり重要な要素であることは明らかである。張（2001）では、中国語を母語とする日本語学習者の数詞節に関する誤用が挙げられているが、本稿では、張（2007）にあるように、誤用に転移の痕跡を見つける手続きを見直し、日本語と中国語の数詞節についての対照分析による転移の予測を用いて、中国語母語の学習者が書いた作文に予測された転移が現れているかどうかについて検証を行った。その結果、正の転移が予測されたものには誤用が見られず、負の転移が予測されたものについては誤用が見られ、転移の可能性が明らかになった。負の転移については、正用もあり、予測とは異なる形式の使用も見られたが、それには日本語能力のレベルが関与していると考えられ、今後の課題として残した。
キーワード：数詞節、中国語母語話者、対照分析、転移の予測、作文

1　はじめに

対照分析が盛んに行われた時代では学習者の誤りの原因は母語と目標言語の相違点によるものとの見方が強かったが、その後、異なる母語の学習者に共通に見られる誤用や対照分析から言語転移では説明できない誤用が次々と明らかにされ、第二言語習得において言語転移は主要な論点とは見なされなくなった。

しかし、迫田（2002）、奥野（2005）に中国語話者のみに特徴的に見られる誤用があると述べられていることから、第二言語習得に母語の転移問題があることは明らかであり、それ故、学習者の言語転移について明らかにしていくことは重要なことと思われる。奥野（2005）では、中国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者）の「の」の過剰使用について、上級学習者の間に特に動詞修飾において中国語の負の転移が見られることや言語転移の作用により修飾部の品詞の種類に関わらず「の」の過剰使用が現れることが示されている。

張（2001）には中国語を母語とする学習者の母語干渉が 20 例挙げられているが、そのうちの一つに数詞・助数詞の諸問題がある。それらは、中国語にはあって日本語にはない助数詞の問題、数詞「一」と助数詞からなる「一＋X」という数詞句の過剰使用の問題、そして、数詞を過剰に連体修飾語として使う「数詞句の連体修飾化傾向」の問題であり、中国語からの干渉と思われる誤用である。このことから、中国語を母語とする学

習者が数詞節を習得するうえで、母語の転移の可能性が考えられる。ただし、張（2007）が「今までの母語転移に関する研究のほとんどが学習者の誤用に転移の痕跡を見つけていくという手続きを取っていることについては、見直す必要があると思われる」（p. 33）と述べているように、誤用のみを研究の対象にするのではなく、本稿では、中国語と日本語の対照研究から転移を予測し、それが、実際に学習者の書いた作文に現れているのかどうかについて検証するという手続きをとることにする。

2　先行研究

「一」を含む数詞節には、「一＋助数詞＋の＋名詞（以下、N）」、「N＋の＋一＋助数詞」、「N＋一＋助数詞」、「一＋助数詞」などさまざまなものがある。建石（2008）では、このうち「N＋の＋一＋助数詞」、「一＋助数詞＋の＋N」、副詞句としての「一＋助数詞」の３つの形式を取り上げ、用法に分け、中国語との対応を表１のように示している。また、そこから中国語を母語とする学習者が習得する上での正と負の転移を予測している。

表１：日本語の数詞「一」と中国語の数詞「一」の対応関係（建石 2008 による）

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">日本語の数詞「一」</th><th>中国語の数詞「一」</th></tr>
<tr><td>①</td><td colspan="2">「N＋の＋一＋助数詞」</td><td>φ</td></tr>
<tr><td>②</td><td rowspan="4">「一＋助数詞＋の＋N」（数量表示）</td><td>対　比</td><td rowspan="4">「一＋量詞＋N」</td></tr>
<tr><td>③</td><td>限　定</td></tr>
<tr><td>④</td><td>累　加</td></tr>
<tr><td>⑤</td><td>基　準</td></tr>
<tr><td>⑥</td><td colspan="2">φ</td><td>「一＋量詞＋N」（②～⑤以外の数量表示）</td></tr>
<tr><td>⑦</td><td rowspan="3">「一＋助数詞＋の＋N」（非数量表示）</td><td>特 定 性</td><td rowspan="3">「一＋量詞＋N」</td></tr>
<tr><td>⑧</td><td>価値付与</td></tr>
<tr><td>⑨</td><td>典 型 性</td></tr>
<tr><td>⑩</td><td colspan="2">φ</td><td>「一＋量詞＋N」（不定冠詞、軽視の含意、典型性）</td></tr>
<tr><td>⑪</td><td colspan="2">副詞句としての「一＋助数詞」（数量表示）</td><td>φ</td></tr>
<tr><td>⑫</td><td colspan="2">副詞句としての「一＋助数詞」（非数量表示）</td><td>φ</td></tr>
</table>

①～⑫の用法や特徴を例文と共に挙げる。例文は建石（2008）から引用した[1]。

①「N＋の＋一＋助数詞」

（例１）その上、自分の身銭を切って、あの夜、神木たちが呼んだ芸者の一人を呼んで貰った。三十五歳の夏代という芸者だった。[=(18)]

①は部分を表す用法であり、対応する中国語はない。また、「N＋の＋一＋助数詞」が

以下のように述語名詞句の位置に生じることもできる。

（例２）私が言ったことはあくまで意見の一つなので、あまり気にしないでください。[=(21)]

次に「一＋助数詞＋の＋N」であるが、「一＋助数詞＋の＋N」には数量のみを表す用法と、そうではない用法がある。ただし、どのような場合にも使えるわけではなく、条件が４つあり、②～⑤に示す。

②「一＋助数詞＋の＋N」（数量表示）対比する場合

（例３）私は日本語学校で５人の中国人と３人の韓国人、１人のタイ人を教えています。[=(28)]

③「一＋助数詞＋の＋N」（数量表示）限定が関係する場合

これは「たった一つの」や「ただ一人の」のように数が少ないことを表す「たった」や「ただ」と組み合わせて使われる。

（例４）これは私にとってたった一つの宝物です。[=(29)]

④「一＋助数詞＋の＋N」（数量表示）累加が関係する場合

これは「もう一つ」や「もう一人」のように「もう」と組み合わせて使われる。

（例５）問題になっているのはこの件ではありません。もう一つの件が問題なのです。[=(30)]

⑤「一＋助数詞＋の＋N」（数量表示）基準となる場合

（例６）最高級のヒレ肉は一頭の牛を調理してもわずか５キロしかとれない。[=(31)]

以上、②～⑤は数量表示の「一＋助数詞＋の＋N」であり、中国語の「一＋量詞＋N」に対応する。中国語には、この他に「一＋量詞＋N」で数量を表す用法があるが、対応する日本語はない（⑥）。

次に「一＋助数詞＋の＋N」の数量表示ではない用法について例を挙げる。

⑦「一＋助数詞＋の＋N」（非数量表示）特定性が関係する場合

話し手は知っているが、聞き手は知らない対象を取り上げ、後の文脈で詳しく述べる場合である。通常の語順でも意味が通じるにもかかわらず、語順が変わっていることが特徴として挙げられる。「一＋助数詞＋の＋N」を使うのは、単に数量のみを表すためではなく、聞き手に注目させるという談話的機能を明確にするためである。

（例７）私は彼女に一つの質問をした。「あの男のどこが好きなんだ」。[=(32)]

⑧「一＋助数詞＋の＋N」（非数量表示）価値付与を行う場合

「一＋助数詞＋の＋N」が述語名詞句の位置に生じ、主語名詞句に対して重要ではない、あるいは、大したものではないという価値付与を行うものである。

（例８）この説を科学者はもちろん、官公庁も既に確定した事実のようにして、議論を進めている。ところが、これは単に一つの説に過ぎない。[=(39)]

⑨「一＋助数詞＋の＋N」（非数量表示）典型性を問題にする場合

述語名詞句の位置に生じ、典型とは言えない主語名詞句が述語名詞句に含まれること

を「一＋助数詞＋の＋N」によって伝えるものである。

（例９）あえていえば、僕自身にとって、スキーはひとつの宗教かなと思うことがある。[=(44)]

⑩日本語にはない中国語の「一＋量詞＋N」（不定冠詞、軽視の含意、典型性）

中国語の「一＋量詞＋N」は、基本的には数量のみを表すが、数詞「一」は英語の不定冠詞のような働きを担っていることもある。また、軽視の含意がある場合もある。

（例 10）辛頁、麿頁兆僥宀、壑頁倖博僥伏、音挫吭房岷俊孀麿。（しかし、彼は有名な学者であるのに対して、私たちは貧しい学生なので、直接彼に会いにくい。）[=(60)]

さらに、典型例を表す際に「一＋量詞＋N」が使用されることもある。

⑪副詞句としての「一＋助数詞」数量を表示する場合

副詞句としての「一＋助数詞」が数量のみを表す場合、「一＋助数詞＋の＋N」と異なり、使用に関する条件は存在しない。

（例 11）フキンをとると、大きなおにぎりが一つ、お皿に載っていた。『ごはんくらい、食べなさい』というばあちゃんの手紙と一緒に。[=(50)]

⑫副詞句としての「一＋助数詞」単に数量のみを表すとは言えない場合

「一＋助数詞＋の＋N」の特定性が関係するよう場合と同様、先に「一＋助数詞」で示しておき、その指示対象の具体的な内容を後から詳しく述べるというものである。

（例 12）説明の冒頭で概要を話すことがいかに大切かを実感していただくため、例文を一つ挙げます。『低インシュリン・ダイエット』に関する説明です。[=(54)]

この用法では、「一＋助数詞」だけでなく、「もう」と組み合わせた「もう一つ」という形式が用いられることもある。

以上が日本語と中国語に見られる「一」を含む数詞句の一部である。建石（2008）では、対応関係があるもの（②～⑤および⑦～⑨）については、習得しやすく正の転移があると予測している。一方、対応関係がないもの（①⑥⑩～⑫）については習得がしにくく負の転移があると予測している。また、建石（2007）ではこれら 3 つの形式以外も含めて中国語との対照研究をした結果から、正と負の転移の予測と、間違って使用すると予測される形式を示している。

3　調査方法

建石（2007、2008）で予測された正の転移と負の転移が、中国語を母語とする学習者の書く作文に現れているのかどうかについて次の三つの仮説(a)～(c)を立て、その検証を行った。

中国語を母語とする学習者の書いた作文に現れた「一」を含む数詞節について、

(a) 建石（2008）で正の転移が予測された数詞節は誤用がない。

(b) 建石（2008）で負の転移が予測された数詞節は誤用がある。

(c) 建石（2007、2008）で負の転移が予測された数詞節では、対応する中国語から予測された形式を使用する。

検証するために使用した作文は、インターネット上で公開されているデータベースから採取した。この国立国語研究所日本語教育基盤情報センター（担当宇佐美洋）によるデータベースには、中国語母語話者 89 人分の書いた作文が公開されている。作文の課題は２種類で、この 89 篇の作文のうち、「一」を含む数詞節がある作文が 21 篇あった。「一」を含む数詞節の例は１篇の作文中に２つや３つあることもあり、データベース全体で 31 例採取することができた。

正誤判定と誤用訂正は、日本語母語話者６名に依頼して行った。判定・訂正者の負担を考え、作文課題別に２回に分けて依頼した。いずれの調査も、作文の課題を示した後、学習者の作文の一部を示し、添削をしてもらった。学習者の作文は、「一」を含む数詞節がある文に下線を引き、前後の文脈を示すため、添削の対象となる文を含む一段落分を提示した。建石（2007）にもあるように、「一」を含む数詞節が数量を表す場合の「一＋助数詞＋の＋N」と副詞句としての「一＋助数詞」、価値付与の場合の「一＋助数詞＋の＋N」「N＋の＋一＋助数詞」など、どちらでも可能な場合があり、訂正文が一つに定まらない可能性が考えられたため、判定・訂正者には最も適当だと思われる文から順に全て書いてもらった。

この結果得られた訂正文を統語的位置と形式によって建石（2008）の①～⑫に分類し、対照研究から予測された転移と照らし合わせた。

4　検証結果

4-1　日本語母語話者による正誤判定と誤用訂正の結果

31 種類の「一」を含む数詞節を日本語母語話者６名に判定・訂正をしてもらったのであるが、そのうち４名以上が同じ形式に添削したものだけを検証の対象とした。ただ、日本語母語話者が添削で揺れたものは１例のみであった。また、その他の 30 例のうち、①～⑫に含まれない形式が３例あった。これらの４例については 4-3 で示す。日本語母語話者の判定・訂正に揺れが見られず分類のできた 27 文については、表２のような結果となった。

①～⑫のうち、該当する使用例があったのは①③④⑥⑦⑨⑪の７種類である。それぞれ該当する使用例数は少ないが、正の転移が予測された③④⑨は、学習者の使用も正用であり、誤用例はなかった。⑦も正の転移が予測されていたが、誤用が１例あった。①⑥⑪は負の転移が予測されており、学習者の使用にも誤用があった。そのうち、対応する中国語の形式がない①⑪について見ると、学習者は①で「一＋助数詞＋の＋N」と単独の「一＋助数詞」を、⑪で「一＋助数詞＋の＋N」を使用していた。⑥では対応する中国語の形式から「一＋助数詞＋の＋N」を使用すると予測されていたが、「一＋助数詞＋の＋N」の他に、単独の「一＋助数詞」を使用した例があった。

表２：形式・用法別学習者の使用数、正用数、誤用数

	転移の予測 （正／負：形式[2]）	使用数	正用数	誤用数	学習者が使用した形式 （誤用数）
①	負：対応する形式なし	8	2	6	一＋助数詞＋の＋N（5） 単独（1）
②	正	0			
③	正	1	1		
④	正	3	3		
⑤	正	0			
⑥	負： 一＋助数詞＋の＋N	2		2	一＋助数詞＋の＋N（1） 副詞句としての「一＋助数詞」（1）
⑦	正	3	2	1	N＋の＋一＋助数詞（1）
⑧	正	0			
⑨	正	1	1		
⑩	負： 一＋助数詞＋の＋N	0			
⑪	負：対応する形式なし	9	5	4	一＋助数詞＋の＋N（4）
⑫	負：対応する形式なし	0	0		

以下に中国語を母語とする学習者の書いた作文に現れた「一」を含む数詞節について、建石（2008）に基づく仮説（a）～（c）の検証結果を示す。

（a）建石（2007）で正の転移が予測された数詞節は誤用がないということについては、使用例のあった③④⑦⑨のうち、⑦以外は誤用がなかった。

（b）建石（2007）で負の転移が予測された数詞節は誤用があるということについては、使用例のあった①⑥⑪すべてに誤用が見られた。

（c）建石（2007、2008）で負の転移が予測された数詞節では、対応する中国語から予測された形式を使用するということについては、（b）で挙げた誤用全てに予測された形式が使用されていたが、①と⑥に関しては予測と異なる形式の誤用例も見られた。

4-2　予測と異なった使用例

4-2-1　正の転移が予測されたが、誤用例が見られたもの：⑦

「一＋助数詞＋の＋N」（非数量表示）のうち特定性が関係する場合（⑦）については、正の転移が予測されていたが、誤用が１つあった。

⑦の誤用例

（例 13）これは<u>冗談の一つ</u>あります。（cn066[3]）

この文のあとには、その冗談の内容が続いているため、母語話者は聞き手に注目させるという談話的機能を明確にする「一＋助数詞＋の＋N」に訂正したと思われる。

4-2-2. 負の転移が予測されたが、正用例があったもの：①と⑪

①と⑪は負の転移と予測されたが、正用と誤用の両方があった。以下、それぞれの正用と誤用を示す。

①の正用例

（例 14）清明は二十四節気の一つで、旧暦の三月、すなわち西暦の４月５日前後です。（cn039-1）

（例 15）たばこのことはもう社会的な問題の一つになっています。（cn058-1）

①の誤用例

（例 16）私にとって、日本に来てから、たばこのことが一つ困る問題である。（cn003-1）

（例 17）彼たちにとって、吸煙は人生の一つの楽しみであります。（cn016）

（例 18）これが子供の将来に影響する一つの原因となる。（cn029-3）

（例 19）春節は、中国の一つ伝統的な祝日である。（cn045）

（例 20）これは端午の節句のもとよりの意味ですけど、今日になったら、だんだんもとの意義を失って、ただ一つの娯楽としてみんなに覚えられています。（cn059-2）

（例 21）中秋節は一つです。（cn080-2）

⑪の正用例

（例 22）それから四つか五つかの「彩蛋」と小麦粉のお粥一杯親友や隣の人などにさしあげる。（cn017-2）

（例 23）たばこと言えば、中国に「食事の後、たばこを一本吸ったら、神様より快適だ」ということわざがある。（cn046）

（例 24）困る時とか、つまらない時とか、たばこを一服すったらすぐ悩みを軽くします。（cn058-2）

（例 25）楽しい時、たばこを一服すったら、気分がもっとよくになります。（cn058-3）

（例 26）いまぼくの宿舎には七つの人がいって、その中にたばこを吸う人が一人いって彼はいつも宿舎の中でたばこを吸う。（cn071）

⑪の誤用例

（例 27）科学家の研究報告によると、一本のたばこを吸うと、生命が 20 秒を減らすということがあります。（cn038-1）

（例 28）彼女は整理する時ベットの四つの角にそれぞれ一つのリンゴを置いて布団の中になつめや落花生や竜眼やくりの実などを置きます。（cn064）

（例 29）毎の客さんにひとつ牛の角の酒を飲んであげます。（cn080-1）

（例 30）だから、ひとが一本のたばこを吸ったと命を一年ぐらい短くするといわれています。（cn086）

4-2-3　使用されると予測された形式と異なっていたもの：⑥

⑥の誤用例

（例 31）子供の衣服とか赤い枕も一つ用意する。（cn017）

母語話者は４名が「一つ」を削除し「赤い枕」のみにし、日本語母語話者は特に数量表示を必要としなかった。この場合、中国語の形式から「一＋助数詞＋の＋N」を使用すると予測されたが、この学習者は、副詞句としての「一＋助数詞」を使用した。

4-3　対応の表に含まなかった使用例

「一」を含む数詞節の使用は 31 あったが、建石（2008）の対応関係に分類できたものは 27 例であった。残りの４例は以下の理由により分類ができなかった。

4-3-1　母語話者の添削が揺れたもの：「一＋助数詞＋の＋N」と「N＋の＋一＋助数詞」

（例 32）「自由」と言うとロマンディチェックな感じがうみ生れやすくて、人生の一つの大きな目標になっていますが、たばこのけむりのように一時のまぼろしだけで、事物の本来の正体が隠*されてしまいました。（cn051）

母語話者の訂正文は、「一」を含む数詞節を削除した「人生の大きな目標」が１名、「人生の一つの大きな目標」が１名、「人生の大きな目標の一つ」が２名であった。他の２名については、「人生の大きな目標」「人生の一つの大きな目標」の２つをあげた人が１名、「人生の一つの大きな目標」「人生の大きな目標の一つ」の２つをあげた人が１名いた。また、「人生の大きな目標の一つ」を選んだ母語話者の１人は、コメントで「「一つの～」にするか「～の一つ」にするか、判断が難しかった」と書いていた。

4-3-2　①～⑪以外の「一」を含む数詞節：単独の「一＋助数詞」

（例 33）たばこのコマーシャルなら 99 パーセントの内容はたばこがいいと言って、後に「たばこを吸うこと健康に有害」と一句を増えるでしょう。（cn029-2）

（例 34）一人が吸ったら、回りの人々が一緒にたばこから造った悪い気体を吸います。（cn038-2）

（例 35）一人が一日にいくつかたばこを吸ってもいい。（cn029-1）

この３例は、「一＋助数詞」を単独で使用している例である。建石（2007）によると、中国語でも「一＋量詞」を単独で使用し、対応関係があるため、正の転移が予測されている。上に挙げた２例も正用という判定であった。しかし、（例 35）については母語話者の訂正が揺れた。「一人が」を訂正しなかった母語話者が２名、「一人が」を削除した母語話者が２名、「一人の人間が」とした母語話者が１名、全体を変えて「吸いたい人はどれだけタバコを吸っても構わない」とした母語話者が１名であった。

5　考察

5-1　負の転移が予測された形式に見られた正用

①と⑪は、負の転移が予測され、学習者の作文には正用例と誤用例が混在していた。誤用があったことから予測通り負の転移の可能性が考えられる。しかし、①と⑪は正用も多く、負の転移が予測された他の形式・用法に比べ、習得の早い段階から正用が見られる可能性がある。

また、正用例のうち、①の（例 15）と⑪の（例 24）と（例 25）がいずれも同じ学生（cn058）の使用であった。21 名分の作文には、同じ学習者が数詞節を複数使っていることがあったが、他の 20 名は誤用が含まれているのに対し、この学習者は 3 例全て正用であった。この学習者が他の学習者と比べて日本語のレベルが高い可能性が考えられる。しかし、本調査の対象としたデータベースでは、学習者の日本語学習歴や日本語レベルは公開されていなかったため、いずれも日本語レベルと転移との関連は明らかにできなかった。

5-2　予測と異なった誤用

⑦では、正の転移が予測されたが、学習者の作文には誤用例が 1 例見られ、その形式は「N＋の＋一＋助数詞」であった。日本語で「N＋の＋一＋助数詞」は、①の部分表示に分類され、中国語にはない形式である。母語話者の添削では、この文の後に続く内容がその冗談の具体例であったため、「一＋助数詞＋の＋N」に訂正したと思われるが、学習者は数多くある冗談のうちの一つであることを伝えたかった可能性も考えられる。5-1 で述べたように、①「N＋の＋一＋助数詞」は、習得の早い段階から使用が見られる可能性があることとあわせて考えると、学習者は部分表示の意味で使用したのかもしれない。しかし、今回は各学習者の使用例が少ないため、この学習者の他の形式の習得との関連は明らかにできなかった。

また、⑥では、誤用のうち、予測と同じ形式以外に、副詞句としての「一＋助数詞」が 1 例あった。5-1 で見たように、この形式も学習者の作文で正用と誤用が混在した形式である。これが習得の早い段階から使用されやすい形式であれば、数量を表すためにこの形式を使用した可能性が考えられる。ただ、この文では母語話者は特に数量表示を必要としなく、誤用になった。学習者はいつ数量表示が必要で、いつ必要でないかが習得できていないと考えられる。張（2001）は中国語母語の学習者の母語干渉に数詞句「一＋X」の過剰使用を指摘している。

以上、予測と異なった使用例について考えたが、それ以外の使用例は予測通りであり、対照分析から予測された正と負の転移が作文には現れていると思われる。

6　さいごに

建石（2007、2008）に基づく 3 つの仮説（a）～（c）を学習者が書いた作文で検証した結果、（a）の正の転移については 1 例を除いて予測どおり誤用はなかった。（b）（c）

の負の転移については、予測どおり誤用があった。ただ、正用もあったことやその形式が他の形式の誤用として現れていることから、日本語レベルが関係している可能性が考えられるが、今回の資料では日本語レベルが公開されていないため、その関係を見ることはできなかった。

また、今回は中国語を母語とする学習者の資料を対象にした調査であり、これが中国語を母語とする学習者のみに見られるのかどうかについては、他の言語を母語とする学習者の調査と比較しなければならない。これも今後の課題としたい。

注

1. 例文の後ろに建石（2008）での例文番号を[=(18)]のように示す。

2. 対応する中国語から学習者が使用すると予測された形式。建石（2007）を参考。

3. 国立国語研究所日本語教育基盤情報センター（担当宇佐美洋）の作文データベース（http://www2.kokken.go.jp/eag/）で使用されている各学習者の番号。ただし、同じ学習者に該当する数詞節が２つ以上あった場合、後ろに数字を加え、「cn080-1」、「cn080-2」のように表示した。

参考文献

奥野由紀子（2005）『第二言語習得過程における言語転移の研究』風間書房

迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク

建石始（2007）「数詞「一」の日中対照研究」中国語話者のための日本語教育研究会第７回研究会発表資料

建石始（2008）「数詞「一」の用法―「Ｎ＋の＋一＋助数詞」「一＋助数詞＋の＋Ｎ」「一＋助数詞」を中心に―」中国語話者のための日本語教育研究会

張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析　中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク

張麟声（2007）『堺・南大阪地域学の世界 Vol.5 中国語話者のための日本語教育研究入門』大阪府立大学